

交流協会フェローシップ報告

台湾の女子サッカーチーム「木蘭隊」の
努力とその展望

国立台湾体育学院 副教授 呂桂花

1992年、京都教育大学を卒業。1994年、京都教育大学にて修士号取得。2003年と2008年に女子サッカー台湾代表チーム（木蘭隊）の総監督を務めた。2009年度（財）交流協会フェローシップ招聘研究者として12月7日から45日間、日本の筑波大学で研究を行った。

はじめに

1987年10月、私は神戸フットボールクラブに加入した。そこから、日本語の勉強をしながら、サッカーをする日々が始まった。当時、私が日本の女子サッカーに対して抱いていた印象は、決して強いチームというものではなかった。弱いと形容してもいいくらいだった。1994年、京都教育大学の修士課程を卒業した私は、母校へ戻って教壇に立った。そこから再び、私は女子サッカーと密接な関わりを持つことになった。

1999年、私は女子サッカーの台湾代表チーム（愛称は「木蘭隊¹」）に、アシスタントコーチとして招かれた。同年、台湾はフィリピンで行われたアジアカップにおいて日本に2対1で勝利し、準優勝に輝いた。しかしその後の10年余り、国際試合で日本に勝っていない。2004年に日本で行われたキリンチャレンジカップは11対0で、2006年のAFC女子アジアカップオーストラリアは11対1で、2008年のAFC女子アジアカップベトナムは11対0で、それぞれ日本に惨敗した。しかも、負ければ負けるほど、両者の実力の差はますます大きくなっていった。女子サッカーチームの育成に携わる者として、これは非常に耐えが

たく、また苦しいことであった。

ここ数年、日本の女子サッカーの努力には目を見張るものがあった。その過程に私は心の底から感動し、またとても羨ましく思った。日本は「失われた10年間」という景気低迷の時期に、多くの企業がスポンサーを降り、リーグは存続の危機に直面した。しかしそのような中でも、日本の女子サッカーチーム（なでしこジャパン）は2003年のワールドカップ、2004年のアテネオリンピック、2008年の北京オリンピックで目覚ましい活躍を見せ、大いに注目されるようになった。

世界の女子サッカーの歴史

女子サッカーの発展の歴史はそれほど長いものではない。しかし、発展のスピードは急速だった。1991年に女子サッカーのワールドカップが誕生した。第一回の会場は中国であった。1996年には女子サッカーがオリンピックの公式競技に加わった。1999年にアメリカで行われた第三回ワールドカップは、女子サッカーの発展の分岐点となった。本大会の参加国数が、これまでの12から16に拡大されたのである。決勝戦を戦ったのは中国とアメリカであった。この試合を見るためにスタジアムに足を運んだ観客は9万0185人

¹ 木蘭（ムーラン）は、中国の物語に登場する女性主人公。老病の父に代わり、男装して徴兵された木蘭は、異民族を相手に各地を転戦し、自軍を勝利に導いて帰郷する。ディズニー映画「ムーラン」（1988年）でも知られる。「木蘭隊」は、台湾の女子サッカーのナショナルチーム（中華台北チーム）の愛称。

に達した。これは、女子のスポーツ競技において過去最高の入場者数となり、サッカー界だけでなく、女子のスポーツ競技の常識を覆すものとして注目された。また、大会期間中の入場者数は延べ65万人、入場券販売による収入は230万ドルに達した。テレビ観戦者は10億人以上に達したと言われている。国際サッカー連盟(FIFA)は「女子サッカーシンポジウム」において、「サッカーの未来は、女子の手にある」とのロサンゼルス宣言を発表し、女子サッカーを世界に普及させ、盛り上げていくことを誓った。この大会の成功により、2001年、アメリカは女子サッカーのプロリーグを発足させた。これにより世界各国のトップアスリートたちが、女子サッカーの発展に貢献することとなった。これは女子サッカーの形態と試合の内容を徹底的に変えた。女子サッカーは、男子サッカーにより近づいた。よりスピーディで、よりレベルアップするようになったのである。

日本女子サッカーの成長

日本女子サッカーはわずか数年の間に、国際舞台で飛躍的な成長を遂げた。その主な要因は以下にあると考えられる。

1. 安定したリーグ制度
2. 各年代の選手を対象としたトレーニング制度
3. コーチの育成制度

日本女子サッカーチームはM-T-M(マッチ・トレーニング・マッチ)の原則に則った練習を行っている。つまり、毎週1つの試合を行い、試合の中から課題を見つけ、トレーニングにより問題を克服する。その後、再び試合を行うことを繰り返すのである。毎年4月から11月まで、日本女子サッカーリーグ(なでしこリーグ)正加盟の16チームがディビジョン1とディビジョン2の各8チームによる3回戦総当りで、合計27試合を行っている。

次に、全国から各年代の将来性のある優れた選

手を集め、集中的にトレーニングを行っている。彼らに対して一貫した指導を行うことで、選手にコンセプトを共有させる。優れた環境の中で選手たちは互いに刺激し、成長していく。多くの「個人」の成長が、結局は全体のレベルアップにつながるのである。

さらには公認S、A、B、C、D級コーチ制度や、公認指導者のリフレッシュ研修会といった制度を確立したことで、日本のサッカー指導者は迅速に世界のサッカー界の変化や動きを把握できるようになったほか、日本サッカーの今後の課題を共有し、指導者のレベルを上げると同時に、選手の素質も高めるようになった。

台湾代表チーム「木蘭隊」の問題点

サッカーの発展は、つまるところ「サッカー人口の増加」と「選手の強化」の2つの柱に支えられている。台湾における女子サッカー人口(試合に参加する選手を指す)は、小学生が約600人、中学生が約250人、高校生が約120人、大学生及び社会人が約100名で、全体で見ても1000人程度である。この選手数は、日本の約3万人とも言われる女子サッカー人口とは比べものにならないほどである。それに加えて、台湾の政府はスポーツを重視してこなかった。スポーツについて長期的な政策を打ち立ててこなかったのである。数年前に「スポーツ白書」が出されたことがあったが、実際にどこまで実施されたかは疑問である。いくつかの計画を打ち出すことがあっても、1~2回実施しただけで突然中止するという始末である。そして数年後、再び新たな計画を打ち出すため、またゼロから始めなければならないという状況が続いている。

国際サッカー連盟(FIFA)のランキングからアジアの女子サッカーの実力の変化を見てみると、2004年が分岐点となり、それ以降、台湾代表のランキングが徐々に下がっていることが分か

表1 国際サッカー連盟の女子サッカー世界ランキング (2009年12月)

世界順位	国・地域名	アジアランキング	平均年齢
1	アメリカ		26歳2ヵ月
2	ドイツ		26歳3ヵ月
3	ブラジル		25歳5ヵ月
5	北朝鮮	1	24歳3ヵ月
6	日本	2	25歳5ヵ月
13	中国	3	23歳9ヵ月
14	オーストラリア	4	23歳3ヵ月
21	韓国	5	22歳0ヵ月
32	ベトナム	6	22歳3ヵ月
33	タイ	7	19歳2ヵ月
35	台湾	8	19歳8ヵ月

■ : 北京オリンピック ■ : 2008年アジアカップ

る。それは中国も同じである。それに対して、日本、韓国、オーストラリア、ベトナム、タイといった国々のランキングは少しずつ上昇している。

表1は、2009年12月に国際サッカー連盟が発表した資料である。国際サッカー連盟には208の国と地域が加盟しており、そのうち161の国と地域が女子サッカーの国際試合に参加している。アジア諸国のランキングを見ると、北朝鮮が世界順位第5位でトップ。次いで日本第6位、中国第13位、オーストラリア第14位、韓国第21位と続いている。台湾は第35位である。世界のトップ15に、アジアから4ヵ国がランクインしている。世界のトップ15の3分1近くがアジア勢ということになる。言い換えれば、我々台湾代表チームも、アジアの四強に復活することを目指せば、おのずと世界のトップ15に近づけるといふわけである。

しかし、表1で注目すべきは選手の平均年齢である。アメリカ、ドイツ、ブラジル、日本の一流選手の平均年齢は25~26歳程度である。それに対して台湾代表選手の平均年齢はわずか19歳8ヵ月である。これは、我々が故意に若い選手を育成しようとしているからではない。台湾に企業や

会社がスポンサーとなって支える社会人チームがないことが原因である。台湾の多くの選手にとって、大学卒業後、もしサッカーを続けようとするならば、大学院に進学するか、又は自分でレクリエーションチームを立ち上げるしか道がないのである。このため多くの選手たちが、選手としてのピークを迎える前にスタジアムを去り、サッカーの世界から完全に身を引く。これは、台湾における女子サッカーチームの数を変動させる原因にもなっている。

台湾代表チーム「木蘭隊」の努力

日本代表チーム「なでしこジャパン」の努力と変化を見て、台湾代表チーム「木蘭隊」は何ができるのだろうか。台湾女子サッカーの課題を探るため、私は2008年、『台湾木蘭女足的願景（木蘭隊のビジョン）』を作成した。具体的な目標としては、2020年までに台湾をアジアの四強に復活させることである。ベトナムでアジアカップの決勝戦が行われたとき、私はこの計画書を持参し、台湾の駐ベトナム代表処（=ベトナムにおける台湾大使館に相当）を訪れた。私は、ベトナムに駐在する台湾企業を相手に、私の計画書を紹介してもらった。私は彼らに対し、台湾女子サッカーチームが置かれている苦境を説明し、選手たちにサッカーを続けられる環境を与え、彼女たちのサッカー生命を長引かせてほしいと訴えた。そして、1つの女子サッカーチームを運営するには、年間約600万台湾元あれば十分であると述べた。しかし、こんなささやかな夢さえ、なかなか実現させるのは難しかった。

ユース選手の強化は、ナショナルチームのレベルをアップさせる原動力となる。例えば、かつて中国代表チームに入っていた孫雯選手、現役で活躍する日本の澤穂希選手、安藤梢選手などは、ユース又はジュニア時代にトレーニングセンターに入っている。その後、自国のナショナルチームで



写真1 2008年木蘭キャンプ



写真2 2009年アディダス木蘭キャンプ

素晴らしい活躍をしたため、よりレベルの高い国のプロリーグに引き抜かれていった。

2008年夏、我々は日本のナショナルトレーニングセンター制度をまねた「木蘭女足訓練營（木蘭キャンプ）」なるものを実施した。これは、私が在籍する台湾体育学院の女子サッカー部を中心に行った、女子サッカーのレベル向上と選手育成を目的とする台湾初のトレーニング制度である。我々が国際試合を通して得た成功と失敗の経験を通して、問題解決のための方法を探し出し、より良いトレーニングと指導方法を提供することが目的であった。我々はトレーニングを通して、選手の意識を強化するとともに、選手が互いに学びあい、刺激しあい、成長しあえる機会を提供した。（写真1、2）

思いがけず全国各地から130名近くもの中学生や高校生が参加した。我々は4日間の合宿生活を送った。トレーニングのテーマは「1対1個人の能力と体のコーディネーション」とした。このときの成功は、多くのコーチや選手たちを感動させた。中でも最も感動したのは我々であった。このことで我々は、継続していく勇気を与えられたからである。

2009年のテーマは「パスと移動」であった。特にパスの方向、タイミング、そしてパスのあとの移動について重点的に練習した。近年、サッカー

に関する多くのテクニッкреポートで共通して指摘されていることに、「プレッシャーの中での基本テクニッ精度の欠如」がある。特に最近のサッカーは、オフェンスとディフェンスの移動が素早く、ディフェンスの選手たちがボールを取り返すためにボールの周りに群がるため、ボールを持つ選手は瞬時に次の動きを判断しなければならない。プレッシャーの中でテクニッを十分に発揮できないのは、決してプレッシャーそのもの問題ではない。それはテクニッを十分に習得していないからである。昨年の夏休み期間に台南県で行われた東アジア予選での対韓国戦で、我々は韓国代表チームのパワーとスピードを目の当たりにすることになった。我々コーチ陣は、敗戦についてほとんどの原因を台湾代表選手たちの体力不足にあると考えた。当然ながら、韓国選手たちがフィジカル面で台湾選手より優れていることは否定できない事実であった。しかし、最も重要なことは「体力を発揮できるかどうかは、試合中の技術や戦術と関係している。ボールに対して効果的な技術と戦術を応用してこそ、競技レベルを引き上げ、良好な成績を残すことができる」のである。これらの課題は、代表選手たちの課題ではなく、大学又は高校生チームの課題でもない。トレーニングに対する考え方を全体的に変えることから始めなければならないのである。

2009年9月、台湾女子サッカーに新たな動きが見られた。台湾代表チームから台湾師範大学の曾淑娥選手と台湾体育学院の林瓊鶯選手の2名が、オーストラリア女子リーグのキャンベラ・ユナイテッドに、また台湾体育学院の林曼婷選手がスペインのリアル・バリャドリー（REAL VALLADOLID）に入団した。これは、1988年に周台英選手（訳注：本稿の筆者である呂桂花さんの後任として、現在、台湾代表チームの監督をつとめる）が、日本の清水FCレディース（その後、鈴与清水FCラブリーレディースと改名）に入団して以来、20年ぶりの台湾女子サッカー選手による海外チームへの移籍になる。彼女たちが海外のチームで蓄積していく貴重な経験は、今後、台湾女子サッカーの発展と台湾代表チームの実力アップに大きく貢献するに違いない。

おわりに

1998年にフランスで行われたワールドカップでは、総人口わずか500万人のクロアチアがベスト4に入った。当時、台湾の李登輝・総統は「サッカー振興計画」を発表した。2002年、陳水扁・総統（当時）は「サッカーの年」を提唱した。2004年、馬英九・市長（当時）は台北市でフットサルのワールドカップを実施した。2006年のワールドカップが終わり、間もなく2010年南アフリカワールドカップがやってくる。しかし、果たしてこの期間に台湾のサッカーに進歩はあったのだろうか。

世界中で人気があったり影響力があるスポーツに限って、正直なところ台湾の選手はほとんど競争力を持たない。これは主に、我々の政府に決意、勇気、ビジョン、そして最も大事な継続する力が欠けているからである。努力の成果は一朝一夕に実るものではなく、日々の積み重ねが大事である。

しかし、残念なことに我々の政府は、地に足をつけて物事を進めようとしなない。ただ、すぐに効果が目に見えるものには投資を行わず、短期的にしかスポーツに対応してこなかった。それはまるで自ら扉を閉めて、世界の潮流が見えないふりをしているかのようなのである。

このような計画は、政府又は中華民国サッカー協会が行うべきであり、我々のような指導者又はサッカー選手が行うことではないという人もいるかもしれない。しかし、誰かが問題を発見し、そしてあきらめずに行動を起こさなければ、永遠に未来への扉は開けないのだ。「台湾木蘭女足の願景（木蘭隊のビジョン）」を書きおろしたとき、私は台湾代表チーム「木蘭隊」をアジアのベスト4に返り咲かせることを一生の目標とすることに決めた。女子サッカーにたずさわる仲間たちの認識を同じくし、20年後の台湾女子サッカーのために努力したいと思っている。そして、我々が生きている間に、次の世代の選手たちが、我々にできなかったことを成し遂げるのを見たいと願っている。

謝辞

今回、財団法人交流協会から助成金をいただき、日本に1ヵ月半滞在して「女子サッカーの育成についての研究」を行った。筑波大学滞在期間には、浅井武、西嶋尚彦、中山雅雄教授から指導を受けた。また、同大学大学院の博士課程に在籍する安藤梢選手、日本サッカー協会（JFA）アカデミー福島の今泉守正チーフコーチ、野田朱美・理事長など、大勢の日本の友人たちにお世話になった。この場を借りて深く感謝したい。今回の研究の成果や日本滞在期間に感じたことなどをベースとして、これからも台湾女子サッカーの発展のために努力する所存である。